東京学芸大学教育実践研究　第18集　pp. 7-12，2022

知的障害児・自閉スペクトラム症児における場面による言語表現の使い分けについて

工　藤　菜乃香*・大　伴　　潔**

（2021年11月25日受理）

KUDO, N. and OTOMO, K.; Use of Polite Form Expressions Corresponding to Communicative Situations in Children with Intellectual Disabilities and Children with Autism Spectrum Disorder Attending a Special School　ISSN 1349-9580

The purpose of this study was to examine the use of polite form verbal expressions corresponding to communicative situations in school-age children with intellectual disabilities and children with autism spectrum disorder. We conducted a questionnaire survey to teachers in a special school who teach elementary- and secondary-school level students. Results showed that many students with Down syndrome used polite forms in various situations at the elementary school level, but a greater number of students used polite forms only in classes, suggesting that verbal use tended to be differentiated according to situations. Regarding to whom students used polite forms, all students with Down syndrome used polite forms only to teachers. Only students with autism spectrum disorder used polite forms to everyone. It was also found that a half of the teachers of the first to third graders of the elementary school level taught the use of polite forms, and so did 87.5% of the teachers of the 4th to 6th graders. At the secondary school level, 92.3% of the teachers taught the use of polite forms. Overall, language use related to employment and social participation was gradually more stressed in the curriculum later in the elementary school through the secondary school levels.

KEY WORDS : Polite Language, School-Age Children, Autism Spectrum Disorder, Intellectual Disability, Down Syndrome

* *Special Needs Education Advancement Program, Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
** *Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*

1．はじめに

言語表現の使い分けは，話者の語用論的能力を反映し，コミュニケーションを円滑に進めるために重要である。言語の語用論的側面には，解釈に特定の視点を要求する「直示」や，疑問文の答えのなかの疑問詞に対応する部分である「フォーカス」，間接的な表現を使う「会話の含意」といったものがあり，「直示」には話し手から聞き手への敬意を表す「丁寧語」がある[1)]。友達，教師，上司等，自分と相手との関係や状況によって適切な言語表現を選択するなかで丁寧表現が求められる。丁寧語は，社会的な上下関係だけでなく，話し手からの親疎によっても使い分けられる。日本語では，代表的な表現として「～です」「～ます」等の文末表現が挙げられる。

Nakamura[2)] は，1 ～ 6歳の対象児に，さまざまな人（親，兄弟，なじみのない大人など）といろいろな活動（ロールプレイ，制作など）に参加させ，発話を記録，分析した。その結果，3歳までに「～です」「～ます」とい

* 東京学芸大学教職大学院　特別支援教育高度化プログラム
** 東京学芸大学　特別支援教育・教育臨床サポートセンター

う表現を使用していた。最初は大人の言葉を繰り返す形で丁寧語を頻繁に使用し，年齢と共に相手によって使い分けることができるようになっていくという結果であった。

学習指導要領解説自立活動編の［6コミュニケーション］の区分の中の［5状況に応じたコミュニケーション］の項目にも記されているように，コミュニケーションを円滑に行うためには，話し相手と聞き手との人間関係や，その時の状況を的確に把握することが重要である。また，場面による言語表現の使い分けは［3人間関係の形成］とも関連する。

しかし，知的障害児や自閉スペクトラム症児の言語表現の使い分けや，丁寧語の使用については詳しいことは明らかになっていない。また，知的障害児や自閉スペクトラム症児は人と人との関係や周囲の状況を把握することに困難を示すことが指摘されている[3)]。知的障害児や自閉スペクトラム症児が様々な人と関わる中で，適切な言語表現を選択し，円滑なコミュニケーションをとることができるように支援するためには，まず知的障害児・自閉症スペクトラム症児の言語表現の特徴について明らかにする必要がある。

よって本研究では，教員への調査を行い，知的障害児・自閉スペクトラム症児が場面によって丁寧表現を使い分けることができるか明らかにすることを目的とする。そして，場面や人に応じて適切な言語表現を選択できるようになるためにはどのような支援が必要なのかを考察する。

2．方　法

2－1．対象

特別支援学校教員小学部27名，中学部14名を対象として以下の内容でアンケートを行った。アンケートは，41部配布し，35部回収できた（回収率85.4%）。回収できた質問紙に対応する児童・生徒数は小学部85名（ダウン症児15名，ダウン症を除く知的障害児22名，自閉スペクトラム症児48名），中学部58名（ダウン症児8名，ダウン症を除く知的障害児17名，自閉スペクトラム症児33名）であった。学校の管理職に文書で目的および実施方法に関する依頼文書を提出し，承諾を得て実施した。

2－2．アンケート

アンケート調査では，障害種や，小学部・中学部による言語表現の使い分けの違い，特別支援学校における丁寧表現の指導の実態の2点を明らかにすることを目的とした。アンケートの項目は以下の9つである。

①児童・生徒の実態（障害種，発語の程度，敬語の有無）
②児童・生徒の敬語の使用場面について
③児童・生徒が敬語を使用できない，しない理由について
④教員と話すときの言葉遣いの指導について
⑤上級生と話すときの言葉遣いの指導について
⑥同級生と話すときの言葉遣いの指導について
⑦乱暴な言葉遣いの指導について
⑧特別支援学校において求められる言葉遣いの指導について
⑨言葉遣いに関する授業実践について

3．結　果

3－1．児童・生徒の実態について

図1・図2は，それぞれ小学部・中学部における対象児の発語について障害種ごとに該当人数を示す。

小学部において発語がある児童はダウン症児11名，ダウン症以外の知的障害児13名，自閉スペクトラム症児28名であった。中学部において発語がある生徒はダウン症児7名，ダウン症を除く知的障害児15名，自閉スペクトラム症児28名であった。

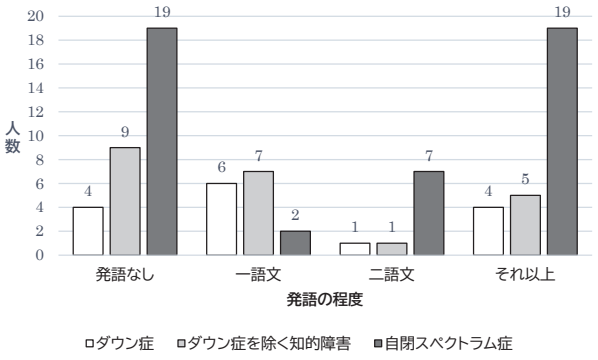

図1　対象児における発語の程度の人数：小学部

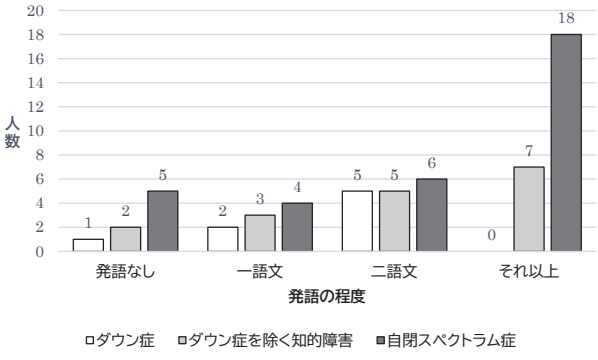

図2　対象児における発語の程度の人数：中学部

図３・図４は，それぞれ小学部・中学部の発語がある児童・生徒における，丁寧表現を含む敬語の使用率を障害種ごとに示す。小学部ダウン症児は敬語なしの児童と場面に限定せず敬語を使用する児童生徒が最も多く40.0%であった。中学部では授業中のみ敬語を使用する生徒が最も多く60.0%であった。ダウン症を除く知的障害児は小学部・中学部共に場面に限定せず敬語を使用する児童生徒が最も多く，小学部50.0%，中学部81.8%であった。自閉スペクトラム症児は小学部では場面に限定せず敬語を使用する児童が最も多く65.4%であった。中学部では授業中のみ敬語を使用する生徒が最も多く41.7%であった。

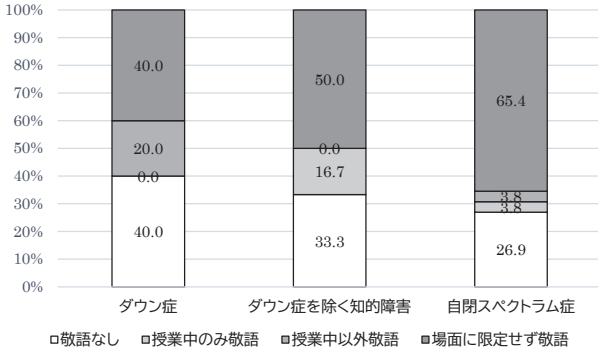

図３　発語がある児童・生徒における場面ごとの敬語使用率：小学部（%）

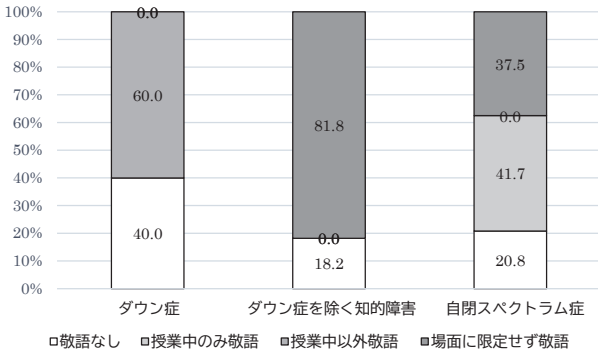

図４　発語がある児童・生徒における場面ごとの敬語使用率：中学部（%）

図５・図６に，それぞれ小学部・中学部における発語がある児童・生徒の話し相手ごとの敬語使用率を示す。ダウン症児は，中学部，小学部ともに全員が教員にのみ敬語を使用するという結果であった。ダウン症を除く知的障害児，自閉スペクトラム症児共に教員にのみ敬語を使用する児童・生徒が最も多かった。全員に敬語を使用する児童・生徒は小学部，中学部共に自閉スペクトラム症児のみで15.8%であった。

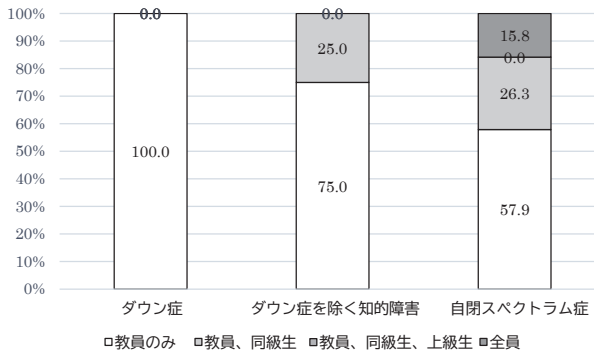

図５　発語がある児童・生徒における相手ごとの敬語使用率：小学部（%）

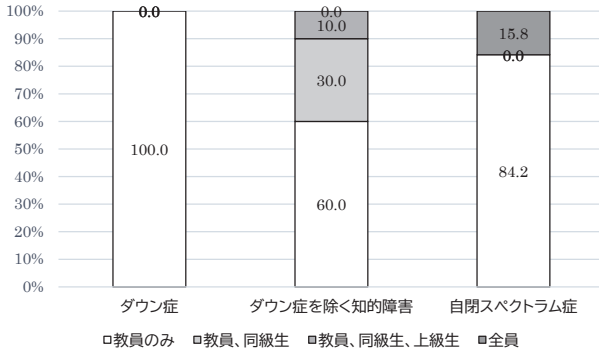

図６　発語がある児童・生徒における相手ごとの敬語使用率：中学部（%）

３－２．言葉遣いの指導の実態について

表１に，話し相手ごとの言葉遣いの指導を行う教員の割合を示す。教員と話すときの言葉遣いの指導は，小学部１～３年では50.0%，小学部４年～中学部３年では約90%の教員が行っているという結果であった。上級生と話すときの言葉遣いの指導は，小学部１～３年では0.0%，小学部４～６年では25.0%，中学部では62.5%の教員が行っていた。同級生と話すときの言葉遣いの指導は，小学部１～３年は30.0%，小学部４年～中学部３年は約60%の教員が行っていた。

表１　話し相手ごとの言葉遣いの指導を行う教員の割合（%）

学年	教員	上級生	同級生
小学部1～3年	50.0	0.0	30.0
小学部4～6年	87.5	25.0	62.5
中学部1～3年	92.3	62.5	61.5

表２は，小学部・中学部ごとの教員と話すときの言葉

遣いに関する指導内容についてまとめたものである。数字は回答した人数を表している。教員と話すときの指導内容として，小学部では依頼する時に丁寧語を求めるという回答が最も多く，次いで常に丁寧語を求めるという回答が多かった。中学部では常に丁寧語を求めるという回答が多く，次いで依頼する時に丁寧語を求めるという回答が多かった。

表２　教員と話すときの言葉遣いの指導内容

学年	内容	回答者数
小学部	依頼する時に丁寧語を求める	4
	常に丁寧語を求める	3
	挨拶する時に丁寧語を求める	1
	報告する時に丁寧語を求める	1
中学部	常に丁寧語を求める	5
	依頼する時に丁寧語を求める	3

表３に小学部，中学部ごとの同級生と話すときの言葉遣いに関する指導内容を示す。同級生と話すときの指導内容として小学部では，依頼する時に丁寧語を求めるという回答が最も多く，次いで敬称を付けるように指導するという回答が多かった。中学部では依頼する時に丁寧語を求める，敬称を付けるように指導するという回答が得られた。

表３　同級生と話すときの言葉遣いの指導内容

学年	内容	回答者数
小学部	依頼する時に丁寧語を求める	2
	敬称を付けるように指導する	2
中学部	依頼する時に丁寧語を求める	1
	敬称を付けるように指導する	1

３－３．特別支援学校において求められる言葉遣いの指導内容について

表４は，特別支援学校において求められる言葉遣いの指導内容についてまとめたものである。数字は回答した人数を示している。特別支援学校における言葉遣いの指導で必要な内容として，丁寧な挨拶ができるように指導する必要があるという回答が最も多かった。次いで，相手を不快にしない丁寧さ，場面や相手による使い分け，社会参加・就労に向けた指導が多く挙げられていた。また，教員が児童・生徒のモデルとなるように正しい言葉遣いを心がける必要があるという回答も多かった。

表４　特別支援学校において求められる言葉遣いの指導内容

内容	回答者数
丁寧な挨拶ができるように指導することが必要	8
相手を不快にしない丁寧さを身に付けられるような指導が必要	7
言葉遣いを場面や相手によって使い分けられるように指導が必要	6
社会参加，就労に向けて指導が必要	6
教師がモデルとなり正しい言葉遣いを身に付けられるようにする必要がある	6
依頼する時の言葉遣いの指導が必要	3
報告・相談の際の言葉遣いの指導が必要	3
SSTと共に言葉遣いの指導を行う必要がある	1
やりもらい文・助詞の間違いが見られるため指導が必要	1

３－４．言葉遣いに関する授業実践について

表５は，言葉遣いに関する授業実践の学年と内容を示す。数字は回答した人数を示している。特別支援学校において言葉遣いに関する授業を行ったことがあると回答した教員は14名であった（小学部４～６年４名，中学部１～３年10名）。小学部１～３年での，言葉遣いに関する授業実践の回答は得られなかった。小学部４～６年では，自分に関する発表・報告を行う授業，ふわふわ言葉とチクチク言葉に関する授業で言葉遣いに関する内容が取り扱われていた。中学部１～３年では，場面に応じて使い分けの練習を行うという回答が最も多く，次いで作業学習での挨拶・報告・依頼が多く挙げられていた。他には面接に向けたやり取りの練習，丁寧な言葉への変換，暑中見舞いの文作成などが挙げられていた。

表５　言葉遣いに関する授業実践の学年と内容

学年	授業内容	回答者数
小学部 4年～6年	自分のことについて発表する授業	2
	ふわふわ言葉とチクチク言葉について	1
	です，ますに関する授業	1
中学部 1年～3年	場面に応じた言葉の使い分けの練習	3
	挨拶の仕方について	2
	報告，依頼，返事の仕方について	2
	自分のことについて発表する授業	1
	面接にむけたやり取りの練習	1
	丁寧な言葉への変換	1
	暑中見舞いの文作成	1

４．考　察

４－１．児童・生徒の実態について

児童・生徒の発語の程度は，小学部では発語なしの児童がダウン症児４名，ダウン症を除く知的障害児９名，自閉スペクトラム症児19名であり，中学部ではダウン症児１名，ダウン症を除く知的障害児２名，自閉スペクトラム症児５名であった。このことから学年が上がるにつれて，障害種に関わらず発語がある生徒が増えていることが示された。

発語がある児童・生徒における，場面ごとの敬語使用率は，ダウン症児は小学部では敬語なし，場面に限定せず敬語を使用する児童が最も多かったが，中学部になると授業中のみ敬語を使用する生徒が最も多く，場面に限定せず敬語を使用する生徒はいなかった。このことから，ダウン症児は小学部では常にいわゆる「ため口」か，常に敬語を使用する児童が多いが，中学部になると場面によって言語表現を使い分けることができる生徒が多くなるということが明らかになった。ダウン症を除く知的障害児は，小学部では場面に限定せず敬語を使用する児童が50%であったのに対して，中学部では81.8%と増えていた。このことから，ダウン症を除く知的障害児は，ダウン症児に比べて場面による言語表現の使い分けをあまりしないという可能性が示唆された。自閉スペクトラム症児は，小学部では場面に限定せず敬語が最も多かったが，中学部では授業中のみ敬語が最も多く41.7%であった。このことから，自閉スペクトラム症児も，場面による言語表現の使い分けができるようになるということが示された。

発語がある児童・生徒における，相手ごとの敬語使用率は，ダウン症児は小学部・中学部共に全員が教員にのみ敬語を使用するという結果であった。このことから，ダウン症児は教員など立場のはっきりとした大人には敬語を使用するが，上級生等年齢の近い子どもには敬語を使用しないということが明らかになった。ダウン症を除く知的障害児は教員の他に，同級生や上級生にも敬語を使用する児童・生徒がいた。自閉スペクトラム症児のみ，全員に対して敬語を使用する児童・生徒がいた。このことから，自閉スペクトラム症児は，ダウン症児，ダウン症を除く知的障害児とくらべて相手ごとに言語表現を使い分ける児童・生徒が少ないということが示された。

４－２．言葉遣いの指導の実態について

教員と話すときの言葉遣いの指導は，小学部１～３年では50%の教員が行っており，小学部４年以上では約９割の教員が指導を行っていた。このことから，小学部４年以上から学校生活における言葉遣いが意識され，ほとんどの教員が指導するということが分かった。上級生と話すときの言葉遣いの指導は，小学部１～３年では0%，４～６年では25%であり，中学部になると約６割の教員が指導するという結果であった。このことから，上級生に対する言葉遣いの指導は，中学部から意識し始める教員が増えるということが示された。これは，就職や社会参加への意識とも関係があるのではないかと考えられる。また，１年前から新型コロナウイルス（Covid-19）の影響で他学年との関わりがほとんどないため，指導する場面がないという回答もいくつか見られた。そのために少し数値が下がっていることも考えられる。同級生と話すときの言葉遣いの指導は，小学部１～３年では30%，小学部４年以上では約６割であった。このことから，上級生と話すときと比べて，同級生と話すときの方が早くから指導され始めるということが示された。これらの結果は，上級生と話す機会が少ないことを反映しており，図５・図６での相手ごとの敬語使用率が教員と話すときに敬語を使用する児童・生徒が多いという結果とも関係があると考えられる。

また，教員と話すときの言葉遣いの指導内容としては，小学部・中学部共に依頼する時に指導する，常に丁寧語を使用するように指導するという回答が多かった。このことから，小学部・中学部で丁寧語の指導として意識されていることは同じであり，特に依頼場面における指導が行われているということが明らかになった。

同級生と話すときの言葉遣いの指導内容としては，小学部・中学部共に依頼する時に丁寧表現を使用する，名前を呼ぶときに敬称をつけるように指導を行うという回答が挙げられた。教員と話すときの指導と同様に，依頼場面での指導が意識的に行われているということが明らかになった。

特別支援学校において求められる指導内容については，丁寧な挨拶や相手を不快にしない丁寧さ，言葉の使い分け，社会参加，就労に向けた指導が挙げられていた。学校卒業後や，学校外でのコミュニケーションも意識して，指導をする必要があると感じている教員が多いことが示された。

４－３．言葉遣いに関する授業実践について

言葉遣いに関する授業実践は，小学部１～３年では回答が得られなかった。表１の，言葉遣いの指導を行う教員の割合が，小学部１～３年では少ないことと関係すると考えられる。小学部４～６年では，自分のことについて発表する授業で敬語を取り扱ったという回答が得られた。小学部４年になると，授業の場面で敬語を使うと

いうことを意識するように指導する教員がいることが示された。中学部１～３年では，場面に応じた言葉の使い分けや，挨拶の仕方，報告，依頼，返事に関する授業が多く挙げられていた。他にも，面接に向けたやり取りの練習等，就労を意識した授業が多く行われていることが明らかになった。

４－４．今後の課題

本研究では，特別支援学校に在籍する児童・生徒がどのような場面，相手に敬語を使用するのかを明らかにすることを目的としたが，Covid-19の影響で他学年との関わりがほとんどないという回答があった。教員や同級生と話すときの言語表現については情報を収集することができたが，上級生・下級生と話すときのデータが少なくなってしまっていることが考えられる。年齢の近い子どもと話す際の言語表現の使い分けについて明らかにする必要がある。また，本研究では教員への質問紙調査をもとに検討を行ったが，児童・生徒の日常生活場面での発話データは収集していない。今後は実際の発話を対象として検討していく必要がある。さらに，教員以外の大人（店員や，地域の大人等）と話す際の使い分けについても調査していくことが課題である。

文　献

1）衣畑智秀：基礎日本語学．ひつじ書房．pp.88−94, 2019.

2）Nakamura, K.:The acquisition of polite language by Japanese children. In K. E. Nelson, A. Aksu-Koç, & C. E. Johnson (Eds.), Children’s language: Developing narrative and discourse competence, Vol. 10, pp.93-112). Lawrence Erlbaum Associates Publishers. 2001.

3）神尾陽子：自閉症スペクトラムの言語特性に関する研究．笹沼澄子編．発達期言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入理論，医学書院，pp.55−70, 2007.